



# 日本の近代化始まりの地萩

日本の産業化は萩藩などが幕末に自力の近代化を目指したモノづくりへの想いから始まった

19世紀末の“世界の奇跡”といわれた日本の近代化、その原動力となった産業技術の導入過程を物語る遺産を、世界の遺産として後世に伝えていくことは、私達の願いです。

萩の産業遺産群は、産業技術導入の最初期の遺産群で、「萩反射炉」「恵美須ヶ鼻造船所跡」「大板山たたら製鉄遺跡」「萩城下町」「松山村塾」の5つの資産で構成されており、幕末に西欧の技術を取り入れ、産業化を目指した地域社会の全体像とその特質を明瞭にあらわしていることに大きな価値があります。すなわち、遺産群全体が幕末当時の萩の地域社会が有していた産業化に関する政治・行政・経済・技術・人材育成の諸要素を示しています。

萩（長州）藩という地域社会が舞台となって、日本独特のものづくり文化の形成と発展が始まったのです。



萩反射炉



恵美須ヶ鼻造船所跡



大板山たたら製鉄遺跡



萩城下町



松山村塾

## 萩の産業遺産群ストーリー

### アヘン戦争を知ったサムライの衝撃

日本を守るために海防強化を  
江戸時代末期の日本は、外国との関わりを限定した鎖国の状態にありました。しかし、産業革命を成し遂げた欧米諸国が、圧倒的な技術力を背景に、日本に国交を結ぶように求めてきました。

天保11（1840）年、清国（現在の中国）とイギリスの間でアヘン戦争が起き、勝利したイギリスは香港を植民地としました。この隣国の敗北は、欧米列強の脅威がまもなく日本にも及ぶことを意味していました。アジア大陸に近い萩（長州）藩など西南雄藩の武士達は、特に大きな衝撃を受け、海防の危機意識から自前の大砲や軍艦をつくらうと考えました。

### 自力の産業化を試みた“モノづくりの心”

- ①「萩反射炉」
- ②「恵美須ヶ鼻造船所跡」
- ③「大板山たたら製鉄遺跡」

危機感を抱いた萩（長州）藩の武士達は、積極的に西洋の技術を勉強し、自力で試行錯誤しながら産業の近代化に挑戦しました。海防強化の一環として、萩（長州）藩は洋式鉄製大砲の製造を試みました。洋式鉄製大砲の製造に必要な金属溶解炉が反射炉です。萩（長州）藩は、反射炉の操作に既に成功していた佐賀藩に藩士らを派遣し、洋式鉄製大砲の造り方の伝授を申し入れましたが断られました。しかし、後に反射炉を見学することが許されたので、反射炉のスケッチをとり、藩に持ち帰りました。このスケッチをもとに、安政3（1856）年に試作的に築造した反射炉が、現在残っている萩反射炉であると考えられています。本来の反射炉は、同じ大きさのレンガで煙突が造られますが、この反射炉は、大部分に地元の安山岩を使用し、ふぞろいのレンガも使用されていることから、藩内の石工、陶磁工、鋳物師などの職人技術を利用して自力で造られたとみられます。萩（長州）藩は、結局は技術的にも費用的にも難しいことから、本式の反射炉の建設は断念しました。萩反射炉は、萩（長州）藩が自力で産業の近代化を目指す中での、トライ＆エラー（試行錯誤）の遺産といえます。失敗は成功のもとというこわごわがあるように、各藩がトライ＆エラーを積み重ねながらも新しいことに挑戦したこと、急速な日本の産業化がなされたのです。

また、萩（長州）藩は、幕府の要請や桂小五郎（のちの木戸孝允）の意見により、洋式軍艦の建造を試みました。伊豆半島戸田村において、日本初の本格的な洋式木造帆船ヘダ号を建造した船大工らを招き、安政3（1856）年に、恵美須ヶ鼻に造船所を設置し、藩最初の洋式木造帆船「丙辰丸」を建造しました。さらに万延元（1860）年に、浦賀や長崎で造船技術を学んだ藩士が設計して、2隻目の洋式木造帆船「庚申丸」を建造しました。なお、近代造船史における最初期のこのような帆船は、萩（長州）藩や幕府の他にも薩摩藩、佐賀藩、水戸藩でも建造されましたが、造船所の遺構が現存しているのは唯一、ここだけです。この丙辰丸の船釘やいかりなどに使用する鉄を供給した拠点の跡を残すのが「大板山たたら製鉄遺跡」です。たたら製法は、千年以上前からある日本の製鉄技術で、砂鉄を原料にして、木炭を燃焼させて鉄を作っていました。職人たちは鍛造や鍛造に高い技能を持ち、溶解鉄の特性や習性を知り抜いており、刀剣用の鉄を作ることも、鋳物や船具用の鉄を作ることもできました。幕末期における西洋技術の導入が、たたら製鉄のような在来匠の技術に支えられて行われたのです。



萩反射炉古写真（大正10年頃）萩博物館蔵



丙辰丸（丙辰丸製造沙汰控）山口県文書館蔵



製鉄作業の様子（先大津阿村山砂鉄採取の図）東京大学工学情報理工学図書館3号館図書室蔵

### 産業化初期の舞台となった萩城下町

#### ④「萩城下町」

産業技術導入の初期の段階は、当時の日本社会を地方ごとに統治していた藩という地域社会を単位として産業技術の導入が進められたという大きな特徴があります。萩城下町は、当時の地域社会における政治・行政・経済の姿をあらわしています。慶長5（1600）年の関ヶ原の合戦で敗れた毛利輝元が、阿武川の支流、橋本川と松本川に囲まれた三角州上に萩城を建設し、城下町が計画的に建設されました。江戸時代は土農工商の身分制度が確立されており、萩（長州）藩においても、支配者層であり指導者としての地位にあった武士と町民の暮らし区域は厳格に区別されていました。以後260年間、萩は萩（長州）藩の政治、行政、経済の中心地として栄えました。

資産の範囲は、①城跡、②旧上級武士地、③旧町人地の3地区です。城跡は、西南雄藩の一つである萩（長州）藩の政治・行政の中心であり、産業化や西洋技術の導入についての藩の政策形成の場でした。萩城は、萩（長州）藩を治めた毛利氏13代の居城であり、13代藩主敬親は、萩反射炉や恵美須ヶ鼻造船所の建設を決定するなど、近代産業化のきっかけを作りました。明治7（1874）年に萩城は解体されましたが、現在まで石垣と堀は良好な状態で残っています。幕末の産業化開始時点における西南雄藩の政治的拠点の姿を今に伝える遺跡と言えます。

旧上級武士地は、城跡とともに萩（長州）藩の政治・行政の中心地であり、産業化等についての政策形成の場でした。萩城と外堀の間で藩の重臣達の家が建ち並んでいた地域で、羽田家の表門や主屋、益田家物見矢倉、周布家長屋門など、土塀や石垣、夏まかんなど周囲の環境と一体となって残っています。

旧町人地は、城下町及びその周辺で営まれていた商業活動や小規模工業を基盤とした当時の伝統的経済の姿を示しています。当時の萩（長州）藩に高度な匠の技があったからこそ、日本の産業化が急速に進んだと考えられます。この地区は、町筋が基盤目状に画され、中・下級の武家屋敷や町屋が軒を連ねていました。木戸孝允旧宅や豪商菊屋家住宅、なまこ壁の土蔵、門土塀が連なり、町筋や家並みがそのまま残っています。

このように萩城下町は、産業化を試みた幕末の地域社会が有していた江戸時代の伝統と身分制、社会経済構造を非常によく示していることで、構成資産として位置付けられています。



「萩城下町地図」（明治2年作成）萩博物館蔵

### 志は海を渡った

#### ⑤「松山村塾」

萩（長州）藩において試行錯誤が続いている中、松山村塾を主宰した吉田松陰は、海防の観点から工学教育の重要性をいち早く提唱しました。これは、直接西洋人から技術を学ぶことができない制限がある中で、工学の教育施設を設立し、在来の技術者を総動員して、自力で進歩的な国づくりの実現を図るというものでした。それ以前の安政元（1854）年には、松陰はペリー提督の艦隊に紛れてアメリカへの渡航を試みました。その精神は、塾生たちに受け継がれました。

日本国内が、開国が攘夷かで大混乱であった文久3（1863）年に、「生きた器械」となると、国禁を犯し、海を渡った若い萩（長州）藩士がいます。松山村塾の塾生でもあった伊藤博文を含む5人です。彼らは後に「長州ファイブ」と呼ばれました。彼らが目指したのは産業革命発祥の地、イギリス。当時、ロンドンでは世界で最も輝いていた都市でした。4階建て、5階建ての建物が並び、銀行や博物館があり、蒸気機関車が走り、馬車道をガス灯が明るく照らしていました。彼らは、日本とイギリスとの国力があまりにも違うことに愕然とし、西欧の近代文明を積極的に学んで日本を強い国に発展させようとして決意したのです。5人は帰国後、日本の近代化・工業化の乾取りとしてそれぞれの道で大きな功績を残しました。



### その後の日本の急速な産業化

#### 製鉄 は工業国家日本を支える屋台骨へ

安政4（1857）年、大島高任が岩手県釜石市の洋式高炉で、日本で初めて鉄鉱石を原料にした製鉄に成功しました。その技術は、明治34（1901）年に操業を開始した官営八幡製鐵所に引き継がれ、巨大な産業システムとなりました。製鉄の技術は鉄道を敷き、船や蒸気機関をつくるために利用され、工業国家日本を支える屋台骨となりました。

#### 造船 大国日本へ

幕末の日本では、木造帆船は造れても、まだ鉄製蒸気船を造る技術はなく、また財政負担の重さから外国船の購入へと転換していききました。しかし、古船が多く故障が絶えなかったため、薩摩藩とイギリス人トーマス・グラバーによって、1868年に長崎市の小菅に修船場が造られました。後に長崎造船所へと発展しました。造船技術は製鉄汽船、鋼船と近代化され、わずか50年余りで、日本は西欧と肩を並べる造船大国になりました。

#### 石炭 が時代を動かす

製鉄、造船の近代化が進むにつれて、エネルギー供給源としての石炭の産業化が進展しました。蒸気の原動力となる石炭は、かつて黒ダイヤと呼ばれていました。九州北部の炭田、特に高島炭鉱と三池炭鉱は日本で最も高品質で安価な石炭が豊富な鉱床でした。また、アジアの大きな市場に近いこともあり、明治末頃には、日本はアジアで最大の石炭産出国となり、九州の石炭は日本の生産量の9割近くを占めました。

## 平成27年の世界文化遺産登録を目指しています 「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」

日本は、幕末における西洋技術の導入以来、西欧以外の地域で初めて、かつ、極めて短期間のうちに飛躍的な発展を遂げました。日本が産業化を達成したことは、現在、経済大国と呼ばれる日本の礎になるとともに、世界史的な価値をもっています。

この飛躍的な発展の大きな原動力となったのが、アジア大陸に近いという地理的特性により、古くから海外との窓口として発展してきた九州・山口です。

「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」は、製鉄、造船、石炭産業の重工業部門に西洋技術を移転し、成功した日本独特のプロセスを示すもので、日本が「ものづくり大国」となる基礎をつくった歴史を物語っています。

また、本遺産は8県11市に立地し、世界的にも例のない稼働中の民間企業による大規模な工業関連施設が含まれており、わが国初の本格的なシリアルノミネーションとして世界遺産登録を目指しています。

※シリアルノミネーション：

広い範囲に分散する複数の資産を同じ歴史・文化財のまとまりとして関連づけ、数珠つなぎにすることににより、全体で顕著な普遍的価値を有するものとして推薦すること。



### 年表



## 長州ファイブ

長州ファイブと呼ばれた彼らは、帰国後、海防強化だけでなく産業の近代化に取り組みました。伊藤博文は初代内閣総理大臣、井上馨は外務・大蔵大臣、遠藤勲助は造幣局長、井上勝は鉄道庁長官となり鉄道の父といわれ、山尾庸三は工部卿（即ち現在の大臣）となり工業の父といわれ、それぞれの分野で近代化に大きく貢献しました。彼らのサムライとしての強い使命感と冒険心を併せ持つ若さの力が、新しい日本の創造を可能にしたのです。文久3（1863）年ロンドンで撮影された「長州ファイブ」（萩博物館蔵）



## 世界遺産とは

世界遺産とは、地球の生成と人類の歴史によって生み出され、次の世代に引き継いでいくべき人類共通の宝物です。ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が世界遺産条約に基づいて、毎年1回登録を行っています。世界遺産には「文化遺産」「自然遺産」「複合遺産」の3種類があります。

平成26年2月1日までユネスコ世界遺産センターへ推薦書を提出  
約1年間イコモス（国際記念物遺跡会議）の審査（夏〜秋に現地調査）  
平成27年夏第39回世界遺産委員会において登録可否決定

登録までの主な流れ